

信頼・不安・無気味
——ルーマンの〈信頼〉概念と〈生活世界〉概念——

これは『現代社会理論研究』第 14 号(2004 年)に投稿した原稿を PDF 化したものです。引用の際にページ数を明記する必要がある場合、紙媒体で確認してください(紙媒体をスキャンしたものを欲しいときは斉藤にメールをください)。

斉藤日出夫
Hideo Saito

Trust, Angst, Unfamiliarity: Luhmann's conceptions of Trust and Lebenswelt

Summary: Criticizing Niklas Luhmann, Anthony Giddens argued about "Trust" by making "existential angst" as a problem of reference. The first purpose of this paper is clarifying Luhmann's conceptual connection by re-examining his concepts of "Trust" and "Lebenswelt", referring to the problem that Giddens' argument raised. This paper will also demonstrate that Luhmann's distinction theory can be interpreted as a criticism to Giddens' explanation scheme.

Key Word: trust, Lebenswelt, existential angst

1 はじめに

本稿の第一の目的は、「不安論」をストーリーとして、ニクラス・ルーマンによる〈信頼〉概念および〈生活世界〉概念の位置づけ・概念連関を明確にすることにある。ここでいう不安論とは、アンソニー・ギデنزが彼の信頼論において準拠している問題である。ギデنزはその信頼論を展開する上で、ルーマンへの批判をモチーフとしており、そこには多くの誤解や概念連関のズレが散見される。しかし本稿は「ルーマン信頼論」を擁護する立場からの「ギデنز信頼論」批判を行なうものではない。そこにある誤解やズレの多くは、ギデنزが依拠している図式・ストーリーから必然的に導かれているものだからであり、そもそも依拠している図式が異なる議論の優劣を判断することはできない。ここで試みるのは、いったんルーマンの議論の組み立てを解除し、ギデنزの準拠問題にのっとり、ルーマンの用いている諸概念をそこに配置していくことである。そのとき、ギデنزが論じるべきだと考えたがルーマンが論じなかったこと、あるいは、ギデنزにはルーマンが論じていないように見えたこと(いわば不安論というストーリー上の「空白」)にルーマンはどのようにアプローチしうるのか(アプローチするだろうと考えられるのか)といったことが明らかになるだろう。あるいは、そのストーリーには収まらない剰余が明らかになるだろう。おそらくルーマンの議論の可能性はそこにある。そのうえで、本稿の第二の目的として、ルーマンの議論がギデنزの議論が依拠している図式に対する(「ギデنزの議論」に対してではなく!)批判として成り立っているということを明らかにする。

本稿は、「信頼」「不安」「無気味」の三つのパートから構成される。まず、ギデنزの信頼論をルーマン批判の要点を中心にとりあげたうえで、ルーマンの信頼論を整理する。次にギデنزの信頼論の根幹である〈実存的不安(existential angst)〉の議論を概観し、ルーマンの「空白」を検討する。最後に、ルーマンの信頼論および生活世界論において重要な概念である「馴れ親しみ(Vertrautheit/familiarity)」の対義語を「無気味なもの(Unheimlichkeit/unfamiliarity)」と読みかえ、ルーマンの議論を一貫したものと呈示してみせる。そのうえで、ルーマン理論がギデنزの(あるいは彼が依拠する実存主義哲学の)図式に対する批判として読めることを示す。

2 信頼

2-1 ギデنزのルーマン批判

ギデنزは『近代とはいかなる時代か?』において信頼について論じている。Giddens[1990=1993]によれば、近代のひとつのメルクマールは、ローカルな文脈から「脱埋め込み化」された抽象的システムにあり、これが時空を超えた相互行為を可能にしている。そして「近代的制度の本質は、抽象的システムに対する信頼メカニズムと、とりわけ専門家システムに対する信頼と密接に関係している」(Giddens[1990=1993:107])という⁽¹⁾。この議論自体は、ルーマンの機能的に分化した社会システムの議論に近似している⁽²⁾。ギデنزは機能的分化の概念を「社会システムが時間と空間を括弧にくくっていくという現象を論じるにはあまり適切ではない」(Giddens[1990=1993:36])と批判するが、〈システム/環境〉の区別による閉鎖的システム概念⁽³⁾にもとづいているルーマンの理論にはこの批判は妥当しない。ギデنزのいう脱埋め込みとはいいかえれば、ローカルな文脈における「この性」とでもいうべき固有のものを、一般化し、〈一般-特殊〉のセリーという特殊なものとして同定するメカニズムである⁽⁴⁾。

本稿において重要なポイントは、そこでギデنزが、〈信頼(trust)〉の対義語は〈不信(mistrust)〉ではない、と述べている点である。これはルーマン信頼論の概念構成である〈信頼(Vertrauen)/不信(Mistrauen)〉という区別に対する根本的な批判とみることができる。ギデنزによれば、

「不信」という用語は、あまりにも表現力に欠けるため、社会的および物理的環境に対する一般化された一連の関係のなかで中心的要素をなす「基本的」信頼の、反対命題とはなりえない。その意味で、信頼の育成は、対象物や人格の明確な同一性を認識していくための、まさに条件なのである。かりに基本的信頼が発達しなかったり、基本的信頼に本来備わっている両面価値をともなわなかった場合、結果的に絶え間ない実存的不安に陥る、したがって、この信頼という言葉の、最も奥深い意味合いにおけるその反対命題とは、実存的「不安(angst)」ないし「危惧(dread)」という言葉のなかに最もよく集約できる精神状態なのである。(Giddens [1990=1993:126])

ここで引用したパラグラフに登場する「実存的不安(existential angst)」が、ギデنزの準拠問題であるといえよう。つまり「対象物や人格の明確な同一性を認識していくための、まさに条件」として抽象的システムに対する信頼というメカニズムはとらえられており、その欠如が実存的不安である。信頼メカニズムの提供するものは「存在論的安心(ontological security)」であり、それは「ほとんどの人が、自己のアイデンティティの連続性に対して、また、行為を取り囲む社会的物質的環境の安定性に対していさぐち確信(confidence)」であると定義される。(Giddens [1990=1993:116-7])

これが「不安論」というストーリーの導入部分である。かかる問題も、一見したところルーマンの記述してきたシステム理論に類似性がないとはいえない。ルーマンは(ギデنزが一瞥しているような)「存在論的問い」を観察対象としてきた、あるいは「存在論的問題」を複雑性という問題へと差し戻したといってもよい⁽⁵⁾。

2-2 ルーマンの信頼論

ルーマンは初期の著作『信頼』において、社会的次元(Sozialdimension)における複雑性の縮減メカニズムとしての〈信頼(Vertrauen)〉という概念を彫琢し、1988年の論文「馴れ親しみ、信用、信頼」(以下「FCT」論文)においてリスク論の文脈との概念接続を図った⁽⁶⁾。本稿はこれらに加え、1986年の論文「生活世界」を特権的に取り扱う。

73年の『信頼』では、信頼の様式は次のように図式化される。①意味と世界を構成する〈馴れ親しみ(Vertrautheit)〉という様式、②人格(Personlichkeit)としての他者が、自由な行為能力を発揮するであろうという一般化された期待であるところの〈人格信頼(Personliches Vertrauen)〉、③他者との世界観の違いという亀裂に抗して、あるシステムが作動していることに信頼を寄せる〈システム信頼(Systemvertrauen)〉。ここで「①」と「②③」の区別、すなわち〈馴れ親しみ/信頼〉という区別について見よう。

世界と意味はまずもって「存在者への馴れ親しみ・存在者の自明性」(Luhmann[1973=1990:29])として知られる。ルーマンは「生活世界」論文において、馴れ親しまれたものと馴れ親しまれていないものの区別によって呈示された世界を〈生活世界〉と定義している(以下、この区別を「生活世界の差異」とよぶ)。ルーマンの生

活世界論については後に詳述するが、生活世界は近代的な分化が成し遂げられる以前からありうる根源的な世界である。

もちろんそれでも世界の可能性の複雑性は、現れはするのだが、しかし、馴れ親しみのあるもの(Vertrauten)と、馴れ親しみがなく(Unvertrauten)疎遠で(Fremden)無気味なもの(Unheimlichen)との裂け目(Schnitt)として現れるにすぎない。そしてその場合には、馴れ親しみがなく疎遠で無気味なものが、単に闘争の対象か神秘化の対象とされるだけなのである。(Luhmann [1973=1990:31])

この馴れ親しみを前提として、つまり馴れ親しまれた世界(生活世界)において、信頼が可能になる。ルーマンのいう信頼はシステムと人格へと向けられる。システムと人格は、社会進化の過程で馴れ親しんだ世界から分出してきた近代的な制度である。

人格信頼は、「他者がその自由すなわち行為可能性の無気味な(unheimliche)能力を、人格であるという意味で発揮するであろう」(Luhmann[1973=1990:70])という期待である。自由が無気味であり、それが「パーソナルなもの」であるということは端的に、過去を利用できないということの意味している。ここで「自由」「人格」という概念が持ち出されていることに注意して欲しいが、つまりこの期待は人格帰属が可能であることを前提している。制度的に自由でない行為は人格帰属を行うことができず、したがって人格信頼も生じえない⁽⁷⁾。システム信頼は人格信頼の発生条件と相関している⁽⁸⁾。無気味な＝自由な他者と共にあることは世界観の偶発性に堪えることであり、したがってシステム信頼は社会的次元における複雑性への対処戦略である。

馴れ親しみと信頼の差異は、時間次元における戦略の違いに見られる。前者において過去が優位を占めるのに対し(「過去は、常に縮減ずみの複雑性なのである」)、後者では過去からの帰結ではない未来を志向したリスクテイク、「情報の過剰利用」が行われる (Luhmann[1973=1990:32-33])。〈不信〉はルーマンによれば信頼の機能的等価物である。「不信もまた生活態度を単純化しているのであり……不信を抱く者は……より少ない情報により強く依存するのである」(Luhmann[1973=1990:132-3])。

「FCT」論文において、信頼の概念構成はよりリスク論に接近する。信頼を可能にする基礎的条件は同様に馴れ親しみ(familiarity)である。しかしルーマンのリスク論の文脈における(リスク/危険)という区別に基づき、〈信頼(trust)〉と〈信用(confidence)〉の差異が主導的になる。信頼は認識においてはリスク状況と、帰属においては内部帰属と結びつく。信用は認識においては危険と、帰属においては外部帰属と結びつく⁽⁹⁾。ギデنزはこの論文に言及し、「ルーマンの見解では信頼という場合、人がある特定の仕方で行おうと決定(deciding)⁽¹⁰⁾する際、その人の念頭には、他にとりうる選択肢が意識的に生じている。……信用の場合人は、期待はずれには相手に責任を負わず(blaming)ことで対処していく」(Giddens[1990=1993:47])と述べているが、このように理解してはならない。ルーマンの議論の焦点は、期待はずれが決定に帰属される(内部帰属)のか、環境に帰属される(外部帰属)のかが問題になっているのであり、意思や意識を「原因」とした因果的説明を行なっているわけではない⁽¹¹⁾。

ルーマンのこの議論は、社会進化、あるいはそれにとまらぬゼマンティック進化の議論と平行している。

伝統的に、馴れ親しみのないものを取り扱う馴れ親しんだ諸用語を用いることのシンボリックな機能は、宗教の領分だった。近代初期においてのみ、新しい用語(riesgo、rischio、risk)が、期待されていない結果は我々の決定の結果でありうるのだということを示すために現れたのだ。……たとえば聖書において、最後の審判は驚きとしてやってくるのだが、後期中世には——告解の制度の影響下で——リスクな行動の予言された結果としてそれを表象しはじめた。罪を犯すと、あなたは魂の救済を危うく(risk)する。それは教会の仕事ではなく個人的なライフスタイルと努力の問題となる。(Luhmann [1988: 96-98])

したがって、なぜ「信頼」論なのか(なぜ馴れ親しんだ生活世界の議論だけでは不十分なのか)という問いには、社会的次元という近代的な複雑性への対処戦略について社会学は議論する必要があるからだ、と答

えることができる⁽¹²⁾。

3 不安

3-1 ギデンズの実存的不安

ギデンズは『近代性と自己同一性』において、「自己: 存在論的安心と実存的不安」という一章を割いている。そこで存在論的安心は、

実践意識の暗黙の性質に、密接に結びつく。あるいは現象学的用語でいうなら、日常生活における「自然的態度」によって前提される「括弧入れ」に結びつく。日々の行為と言説の、まったく取るに足らないように見えるかもしれない面の反対側に、混沌は潜む。(Giddens [1991:36]、傍点引用者)

と定義される。そしてほぼ同義語としてエリクソンの〈基本的信頼(basic trust)〉概念を引き、幼児のパーソナリティ形成の過程を記述する。そこでキー・タームとなるのが幼児とケアテイカーとの間の〈潜在的空間(potential space)〉(ウィニコット)である。「移り変わる対象(transitional objects)」が、潜在的空間の橋渡しをする。それは幼児と主要なケアテイカーを「引き離しつつ関連付ける」。つまり、自他未分化な、溶け合うような統合性ではなく、不在(absence)を感情的に受容することである。したがって、基本的信頼の獲得は静態的状况ではなく過程・局面として理解される。

主要なケアテイカー・エージェントと統合される局面から、幼児は自分自身をそのエージェントから切り離す(separate)。同時に、ケアテイカーは、子供のニーズを満たすことに払う継続的注意の度合いを減らす。初期の、そして無意識の非-自(not-me)がこの切り離しを通して現れるのを許す潜在的空間は、大人の精神療法における、ある時点でなされる切り離し(separation)の段階〔転移・逆転移の切断〕に対応する。初期の幼児の愛着の場合に、信頼と堅固性を通して達成されるのでない亀裂は、心的外傷という結果をもたらす。(Giddens[1991:42])

繰り返すが、「外部世界(external world)」の受容は、不変の対象世界や、一貫したケアテイカーの「そばにいること」から導かれるのではなく、「今はいないけれども戻ってくること」に対する「信仰」から導かれる。このリズムカルな過程・局面は、容易にフロイトのFort-Daを連想させる(実際ギデンズは、子供が鏡に映った自分がいなくなることを本当に自分がいなくなることとして捉える、鏡を相手にした遊びを引用している)が、この精神的リズムの問題⁽¹³⁾にはここでは深入りしない。

ギデンズは「実存的問題(Existential questions)」と題した節で、「存在論的に安心であること」を実存的問題⁽¹⁴⁾に対する「解答」を所有することであると定義しているが、「存在論的安心は、『存在』、あるいは現象学の用語でいう『世界-内-存在』と関係している」(Giddens[1990=1993:117])と述べているように、ギデンズはハイデガーの存在論(そしておそらくそれはサルトル経由である)に依拠して議論を組み立てている。したがってこれらの「問題」も、存在論-実存主義哲学の系譜との関連で解釈できるだろう。

Heidegger[1927=1994]によれば、「ある」(事実存在existentia)と「である」(本質存在essentia)という存在の二様式は、存在者の存在様式であると同時に〈現存在(Dasein)〉のそれでもある。現存在はしばしば「人間」というタームで置き換えられるが(非常に問題含みの置き換えであるが⁽¹⁵⁾)、現存在は、〈存在了解〉(あるいは〈存在企投〉)を通して存在者を在らしめる。つまり対象世界=オブジェクト・レベルに対するメタ・レベルとして存在する。このような現存在のあり方を〈関心(Sorge/care)〉とよぶ。現存在も存在者のひとつであるから、内世界的なものである(オブジェクト・レベルに位置する)のだが、同時にその世界を規定するものそのものである(メタ・レベルにも位置する)ことによって、現存在は世界的なもの=剰余をもその成分として持っている。このような、関心でありながら(存在了解を備えながら)存在者でもあるという現存在の性格を、〈世界-内-存在〉という。そして、不安こそが世界-内-存在の、〈情態性(Befindlichkeit)〉としての根源的〈気分(Stimmung)〉であ

る。

ではこの根源的とよばれる不安とは何か？そもそもいったい「何-に-対する」不安なのか？「不安がそれに臨んで不安を覚えるところのものは、世界-内-存在そのものなのである」(Heidegger[1927=1994:392])あるいは「おびやかすものがどこにもないということが、不安がそれに臨んでおびえているところのものの特徴である。不安は、自分が何に臨んで不安を覚えているのかを『知り』はしない」(Heidegger[1927=1994:393])。サルトルはこれを受けて、不安は〈対自存在〉の「自由そのものによる自由の反省的把握」(Sartre[1943=1999:107])であると定義する。「芝生に立ち入るべからず」と書かれた看板を前にしたときに、対自存在はそれを「命令」として選択しているのは自分自身であると知って不安に脅える(端的に看板の命令に従う精神を「くそまじめな精神(l'esprit de sérieux)」とよぶが、ハイデガーのいう〈頹落〉に正確に対応するだろう)。ハイデガーの現存在分析にとって頹落という現象が重要なのは、それが他の何ものでもなく、世界-内-存在そのもの・本来的な自己自身からの逃亡であるからだ。頹落した存在者は、「世間」に没頭した「ひと(das Man)」であり、現存在分析にとって頹落の分析は迂遠であるように見える。しかし、それが「…からの逃亡」という在り方をしているがゆえに、現存在の存在論的分析にとって重要な位置を占めるのだ。おそらくギデンズの不安論のモチーフは——ハイデガーのモチーフとは反転しているが——ここにある。

「存在論的フレームワーク」はこのように、世界-内-存在という性質によって、循環している(メタ・レベル＝存在と、オブジェクト・レベル＝存在者の循環)。この自己言及性によって、世界はいわば底が抜けている。ギデンズのいう「安心」は、頹落という在り方においてのみ獲得できる。したがってここで、ハイデガー差異：〈頹落／不安〉とギデンズ差異：〈安心＝信頼／不安〉の図式上の同型性が確認された。

つぎに、ルーマンの問題解決戦略をみてみよう。

3-2 ルーマンの生活世界論

馴れ親しみという様式は、人格やシステムといった特殊近代的なものの分出以前にある根源的な様式である。とはいえ、生活世界は近代化の過程で消えたり植民地化されたりはしない。生活世界は「最も根源的で第一次的な差異」(Luhmann[1986=1998:113])であり、つねに地平の地平として作動中の差異である。

ルーマン理論の主導的差異が〈システム／環境〉差異であることはよく知られているが、この差異自体、差異化する〈区別〉を先行するものとして持つ。したがってルーマン理論のすべての出発点は〈区別〉であると断言してよい。この〈区別〉は、〈観察〉の一つのアスペクトである。「観察とは、ある区別を用いて、区別を構成する二項のうち的一方を(したがって他方ではなく)指し示すことである」(Luhmann[1987=1993:113])。こうして、観察の作動(operation)による世界の構成が、社会学の観察対象になる⁽¹⁶⁾。このことから、最も根源的である生活世界差異はルーマン理論の根源でもあるだろう。以下、区別の論理にしたがって、生活世界とはなにかをもう少し詳しく見ていこう。

いかなる区別もない状態を、ルーマンは「マークされていない状態(unmarked state)」とよぶ⁽¹⁷⁾。いかなる区別もないのだから自己もなく、複雑なものとそうでないものの差異もないのだからいかなる「問題」も発生しない(処理しなければならない・負担しなければならない複雑性がない)。だが最初の区別の導入によって、最初の「内部」が発生する。

我々は、マークされていない空間にたどりつく(そして我々がそこに含まれていることも発見する)。我々は最初の命令を実行する:「区別を書き込め!」。これをなすことにおいて我々は、区別のどちらの側を意味するのかを指示するように強いられる。意味することを(おそらく自分の身体を)指示しつつ、我々はその区別を精緻化する。(Luhmann [1988:95])

観察は区別を用いた〈指示〉である。指示が反復されたとき、直観的に納得できることだが、たんなる区別以上のもの、つまり価値が発生する。「明確に確認されなければならないことは、区別というものが基本的に非対称[優位関係の落差があるもの]だということである」(Luhmann[1986=1998:107])。ここにおいて単純な論理

学からは離れることになる。

どんなに反復されても、それはつねに同一の指示でしかない。即ち $\neg \neg = \neg$ である。スペンサー・ブラウンはこれを、凝縮(condensation)の形式と名づけている。しかしこの世界では、その意味を変更せずに二度指示されるものはない。したがってわれわれは、反復の意味的多値性に注目せざるをえず、指示が反復されることによって馴れ親しまれたという性格(ならびにそれによる動機づけ)が発生すると解釈しなければならない。指示が反復されることによって、指示されたものは馴れ親しまれたものとなり、人がそこから出発したところの区別が同時に、馴れ親しまれたものと馴れ親しまれていないものという付加的性格を獲得する。(Luhmann [1986=1998:107]、傍点引用者)

つまり区別は指示(の反復)によって、意味の価値的なヒエラルキー化をおこなう⁽¹⁸⁾。指示されて凝縮された意味的世界において、我々は馴れ親しまれたものと馴れ親しまれていないものという、価値的に区別された世界に生きることができるようになる。通常、われわれは馴れ親しまれた世界に生きる。「今やわれわれは、あらゆる馴れ親しまれた意味凝縮物の指示連関を生活世界とよぶことができる」(Luhmann[1986=1998:108])。そしてルーマンは「馴れ親しまれたものとそうでないものとの区別それ自身が、馴れ親しまれた区別となる」(Luhmann[1986=1998:109]、傍点引用者)という。これが〈再参入(re-entry)〉とよばれるところのものである。区別によってマークされた空間に当該区別が導入されるのだ。指示されて凝縮された意味的世界において、我々は馴れ親しまれたものと馴れ親しまれていないものという、価値的に区別された世界に生きることができ、さらに価値的に馴れ親しんで生きることができるようになる。

ここまでで明らかになったことを整理しよう。ハイデガー＝ギデンズは、〈頹落＝信頼／不安〉区別を採用する。不安は、現存在の存在了解のループ(対自存在)において、頹落＝在宅感から引き剥がされるところに生じる。ルーマンは、〈馴れ親しんだもの／馴れ親しんでいないもの〉区別の一方の側＝馴れ親しんだものの空間に、〈信頼／不信〉という特殊近代的な区別が導入された、という図式を描く。ルーマンにとって、なんらかの「規定された不信」(それは上述したように信頼の等価物である)を表明するにはその前提となるようななんらかの意味での信頼(馴れ親しみ)が必要なのであり、そうでなければいかなる表明もありえない。「信頼あるいは不信を抱いて生を将来へと投げ込んでいくためには、一定の馴れ親しみ・社会的に構成された類型が必要なのである」(Luhmann[1973=1990:32])。図式的には、ギデンズには「無気味」概念が欠如し、ルーマンには「不安」概念が欠如している。だが、容易に連想できるように、ハイデガー＝ギデンズの述べるような自己言及のループ、底の抜けた不安という情態性は、ルーマンの言葉でいえば観察する自己を観察する二次的観察に対応するだろうし、のちに触れる論点によって、ハイデガー的な不安が無気味さをともなうことが確認されるだろう。

ここで、もう少し詳しく「社会進化」とルーマンがよぶ過程、馴れ親しんだ空間に区別が導入されていく過程に触れておきたい。

4 無気味

4-1 無害化戦略

前節で述べたように、〈馴れ親しんだもの(familiarity)／馴れ親しんでいないもの(unfamiliarity)〉という区別自体が、馴れ親しんだ区別となって馴れ親しんだ空間に再参入してくる(以降、見やすくするため、この再参入した区別を「生活世界差異」と区別して「馴れ親しみ差異」とよぶ)。したがって〈無気味なもの(unfamiliarity)〉自体がすでに馴れ親しんだものとして無害化されている。ところで〈信頼／不信〉区別も、馴れ親しんだ空間に導入されたものであった。このような、論理的に言えば二値コードによる否定的区別(p／ \neg p)に対して、同時に並列する他の区別を、ルーマンは第三の値という意味で、ギンター由来の概念である〈棄却値(Rejektionswert)〉とよぶ。

ルーマンは社会進化について、「単に馴れ親しまれたものの領域がさらに分けられること」ではないと述べ

る。すなわち、新たな区別(=社会システム)が可能となるコンテキストの変化から、生活世界差異の再定式化として〈真/偽〉(法/不法)といった区別が生まれる。そして、〈真/偽〉区別が生活世界差異から切り離されると、(それ自体馴れ親しんだ空間にひとつの区別として再参入している)馴れ親しみ差異は「真偽の区別に関して[二値的コードの内と外で同時に働く]ひとつの棄却値を獲得する」。これが〈真/偽〉のコードに対する「未規定性という第三の値」であり、これは「真偽の区別が馴れ親しまれていないものには適用できない」ということを表している。〈真/偽〉の区別は、馴れ親しみ差異を「問題としつつも、その違いを問題にしない」。いわば「第三の値が共に機能する」。(Luhmann[1986=1998:111-2])

かかる事態を社会進化とよぶ。区別するシステムどうしは互いに棄却関係にある。つまり区別が棄却値を得ることをもって、社会は機能的に分化しているのである。

4-2 超越的なものの仮構

ふたたび「不安論」のストーリーに戻ろう。ハイデガーは現存在分析の過程で不安と無気味を連続性のあるものとして捉えていた。

不安においては『(われともなく)無気味である』……しかし無気味さ(Unheimlichkeit)という言葉は、それと同時に、落ち着いた家郷をもたぬ居心地の悪さ(Nicht-zuhause-sein)をも意味している。……世間は現存在の平均的日常性のなかへ、くつろいだ安心感や当たり前のような在宅感を取り入れてくるのである。これに反して、不安は現存在を、「世界」のなかへ頹落的に融けこんでいるありさまから連れもどす。(Heidegger[1927=1994:397-9])

さきに、ルーマンの言葉でいえば不安という情態性は自己の二次的観察であるだろうと述べた。世界を観察によって構成するシステムが、その構成過程を観察するとき、世界の偶発性を観察することになるだろう。ルーマンの語彙に「情態性」のような感情的なニュアンスは含まれてはいないけれども、プロセスの記述としては充分である。問題の所在はどこか。偶発的でない世界構成なら馴れ親しんだものとして内部帰属できるが、偶発的なものは無気味なものとして外部帰属される、ということではない。あらゆる世界構成は偶発的である。二次的観察によってそのことを観察できる。にもかかわらず、あらゆる区別には馴れ親しみが凝縮しているがゆえに、偶発性に対して信頼か不信か、あるいは内部帰属か外部帰属かという、ある程度定式化された「指し手」を接続することができる。このことをわれわれは「無害化」とよんだ。信頼や馴れ親しみ差異の戦略はこれである。

本稿はギデنزやハイデガーが述べるような「問題」が起こらないと主張するものではない。そのような「問題」は起こるだろう。しかし、日常の在宅感の中に頹落してられる信頼に対し、その背後＝外部に混沌を配置して、この〈内部/外部〉差異の維持・横断を論じるストーリー、図式を批判するものである。いいかえれば、〈内部/外部〉差異は、複雑で混沌とした外部という絶対的な超越性を前提することで成り立っている。このような前提は、説明されえないものを仮構することによってあらゆる説明の説明コストを外部帰属しているにすぎない(切断操作)。当然ながら、説明それ自体が切断操作を行うことによって、負債としての説明コストは山積していくことになり、膨大な負債を抱え込むことになるだろう。このような学的説明の作動自体が社会学の観察対象となりうる。

本稿はギデنزとルーマンの差異を、議論の精緻さや優劣において観るのではなく、かかる図式、「世界問題」を参照する際の前提図式において観る方針をとってきた。再度図式化すれば、ギデنزには、混沌で複雑な絶対的超越としての外部を説明の背後に仮構する。ルーマンは、区別以前にいかなる複雑性も超越性も認めない。馬場靖雄はルーマンのいう「複雑性」について、同様の観点から次のように述べる。

「複雑性の縮減」は、システムと環境の差異の成立を説明しうるような「根本概念」ではない。すでに〈システム/環境〉の区別がなされているところに複雑性概念が付加された場合に初めて、「複雑性の縮減」

について語りうるようになるのである。したがって出発点となるのは、あくまで〈システム／環境〉の差異である。(馬場靖雄[2001:43-4])

つまり世界があらかじめ複雑なのではなく、〈システム／環境〉差異を用いて観察したときにはじめて世界は複雑なもの「である」という記述が可能になる。

5 おわりに

本稿では、ギデンズの準拠問題であるところの「不安論」をストーリーとして借用し、ルーマンの信頼概念と生活世界概念の連関を検討してきた。ギデンズの語彙に込められた感情的ニュアンスを、ルーマンは「複雑性の縮減メカニズム」に与えてはいないけれども、そのことは、ギデンズが記述してきた「問題」が起こらないことを主張するものでもなければ、無視してかまわない問題状況であると考えられることを意味するものでもない。ここで行ってきたのは、ギデンズとルーマンそれぞれの議論が前提とするものの、比較考量である。ギデンズは、信頼の対義語が不信では表現力に乏しいとしてルーマンを批判する。それは、信頼というメカニズムを不安に対する戦略として位置づけ、説明しようとするストーリー上の必然である。しかし本稿が「ストーリー」という言葉を用いてその準拠問題を記述したように、ギデンズの議論は絶対的超越性を仮構することで成り立っている。

ルーマンの信頼論は、〈馴れ親しみ〉から区別される〈信頼〉という歴史的に新しい戦略を描く試みである。ルーマンの信頼論および生活世界論の社会学的インプリケーションは、こうだ。社会という近代的な、歴史的に新しいものは、馴れ親しまれた空間に導入された諸区別(=諸社会システム)のことである。この諸区別は、馴れ親しまれている。歴史的に新しい社会学というプロジェクトは、馴れ親しまれた区別についての学であり、つまり、社会についての学である。

【注】

- (1) 本稿では訳書がある文献については訳書のページ数を表記するが、訳文は断りなく変更している。
- (2) むろん決定的な違いもいたるところに散見される。たとえば「抽象的システムに対する信頼は、多くの場合そうしたシステムに責任を負う人間や集団との出会いを必要としており、私は、そうした人間や集団との出会いのことを、抽象的システムへのアクセス・ポイントと称しておきたい」(Giddens[1990=1993:106-7])など。
- (3) ルーマンのシステム概念は自律的で閉鎖的であるところの意味的な位相空間であり、時空を括弧にくくする。
- (4) 後述するが、ルーマンの議論はこの「ギデンジアン・メカニズム」(=一般化の事前に措定される普遍的な「この性」!)への批判として読むことができる。
- (5) ルーマンは「なんの信頼も抱きえないならば、人は朝に寝床を離れることさえできまい」、「人間は、世界の法外な複雑性(未規定性)に、無媒介で直面することはできない」(Luhmann[1973=1990:1-2])と述べている。
- (6) 『信頼』においても信頼概念はリスク概念と密接な関係において論じられている(信頼がリスクテイクであることははっきりと明示されている)。本稿はそこに断絶があると考えているわけではない。
- (7) ルーマンは自由権との関連で帰属の問題を論じている。「自由とは、因果性に関わるものでもなく、また単に本源的な原因を設定することによって因果連関を中断するものでもない。それは帰責の問題なのである。自由体験は、行為が人格の活動システムに帰責させられるか、それとも社会的な活動システムに帰責させられるか、それがいずれに帰責させられるかに左右される」(Luhmann[1965=1989:95])。そして「自由権は……とりわけ行為空間——それを充たす行為が人格としての人間に帰属させられる行為空間——の保護という点にある」(Luhmann[1965=1989:110])。さらに「帰責は自由を構成する社会過程から生じる」(Luhmann[1965=1989:128])。
- (8) すなわち因果的な要因としてとらえられてはならない。
- (9) というよりもむしろ、〈リスク／危険〉という区別が〈内部帰属／外部帰属〉という区別に対応した区別なの

である。リスクは損害を決定に帰属する状況であり、危険は環境に帰属する状況である。小松丈晃[2003]によるルーマンのリスク論を参照。

- (10) 邦訳では「意思決定」と訳されているが、ルーマンの議論においては、決定が意思によるものであると帰属する過程が問題になっているのであり、その決定が(自由)意思によるものであるか否かは問題になっていない。
- (11) 自由・自由意志の因果的解釈からの切断についてはすでに注(7)で述べた。
- (12) これもまた、複雑性の増大→複雑性への対処、という因果図式でとらえられてはならない。前提となるのは進化的理論の確率論的思考である。ここではマトゥラーナとバレーラの進化的理論における構造的ドリフト概念(Maturana and Varela[1984=1997:133])にアドレスしておきたい。
- (13) 東浩紀[1998:180-, 260-]を参照。
- (14) 以下の4つの問題を列挙している。①「外的現実」の存在論的フレームワークの発見、②時間的無限、すなわち「永遠」と比較した有限性(=キルケゴールのいう〈主観的死〉)、③他者、すなわち知ることのできない不確実性、④自己同一性。
- (15)「とりあえず、『主体』概念が放棄されねばならないことは明白であろう。また、正当にであれ不当にであれ、『人間』に帰せられたあらゆるものについても同様である……人間が——身体としてであれ人格としてであれ——観察から独立にあらかじめ存在している統一体であるという観念も放棄されねばならない」(Luhmann[1987=1993:111])。
- (16) 前者の観察を〈一次的観察〉、後者の観察(観察の観察)を〈二次的観察〉とよび、ルーマンは二次的観察を〈脱構築〉と言い換えている(Luhmann[2002])。
- (17) ルーマンは1995年の『社会の芸術』以降、「マークされない空間(space)」と、「マークされない状態(state)」を区別している。マークされない空間とそれ以前によんできたものは、ある状態に区別を導入したさいの、一項のことである(そこにはいまだ別の区別が導入されていないからだ)。「われわれは今後このふたつの概念を分離しておけるよう、区別を含まない世界状態について考えている時には『マークされない状態』という言葉を使うことにしたい。それに対して『マークされた空間』の反対概念を意図している場合は『マークされない空間』と言うことにする」(Luhmann[1995:51-2])。ただし本稿では、引用文献で用いられている語彙はそのままにした。
- (18) これは初期デリダのいう代補 *supplément* の論理に正確に対応する。形而上学は同一性が現前すると考える。だがこの第一項としての同一性は、第二項の否定によって担保される。つまり第一項はそれが存在するために第二項をあらかじめ必要とするのであり、(同一性ではなく)差異／差延が先行している。第二項は第一項が成立するために投射(*projet*)的棄却(*abjection*)が行われる否定の場・ゴミ捨て場であり、したがってこの二項関係はヒエラルキー化される。代補は差異無き現前に外部から付け加わってくるのではない。代補の論理によれば「外部は内部であり……欠損は内部の外部としてすでに内部の内部に存在する」(Derrida[1967=1972:141])。

【文献】

- 東浩紀, 1998, 『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』新潮社。
- 馬場靖雄, 2001, 『ルーマンの社会理論』勁草書房。
- Derrida, J., 1987, *De la grammatologie*, Minuit. (=1972, 足立和浩訳『根源の彼方に——グラマトロジーについて』(上、下)現代思潮社。)
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立書房。)
- , 1991, *Modernity and Self-Identity*, Stanford.
- Heidegger, M., 1927, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag. (=1994, 細谷貞雄訳『存在と時間』(上、下)ちくま学芸文庫。)
- 小松丈晃, 2003, 『リスク論のルーマン』勁草書房。

- Luhmann, N., 1965, *Grundrechte als Institution*, Duncker & Humblot. (=1989, 今井弘道・大野達司訳『制度としての基本権』木鐸社.)
- , 1973, *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*, 2aufl., Ferdinand Enke Verlag. (=1990, 大庭健・正村俊之訳『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房.)
- , 1986, “Die Lebenswelt- nach Rucksprache mit Phänomenologen”, *Archive für Rechts- und Sozial Philosophie*, LXXII/Heft 2, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden GmbH. (=1998, 青山治城訳「生活世界: 現象学者たちとの対話のために」『情況』1・2月合併号: 101-131.)
- , 1987, “Autopoiesis als sozialogischer Begriff“, Hans Haferkamp; Michael Schmid Hrsg., *Sinn, Kommunikation und sozial Differenzierung*, Suhrkamp. (=1993, 馬場靖雄訳「社会学的概念としてのオートポイエーシス」『現代思想』vol.127-10: 109-130.)
- , 1988, “Familiarity, Confidence, Trust: Problems and Alternatives”, Diego Gambetta ed., *Trust: Making and Breaking Cooperative Relations*, Oxford: Blackwell.
- , 1995, *Die Kunst der Gesellschaft*, Suhrkamp.
- , 2002, “Deconstruction as Second-Order Observing”, William Rasch ed., *Theories of Distinction: Redescribing the Descriptions of Modernity*, Stanford.
- Maturana, H. and Varela F., 1984, *El Albol del Conocimiento*, Editorial Universitaria. (=1997, 管敬次郎訳『知恵の樹』ちくま学芸文庫.)
- Sartre, J.-P., 1943, *L'Être et le Néant*, Gallimard. (=1999, 松浪信三郎訳『存在と無』(上、下)人文書院.)